

北アルプス朝日岳・金山沢 山行報告

山行日：平成30年5月4日（金）～6日（日）

天候：4日 雪のち晴れ 5日 みぞれのち曇りのち晴れ 6日 晴れ時々曇り
（4日と5日は強風）

登山方法：山スキー

メンバー：CL 会員外O 薄井（記録）

行動時間：

4日 14:40 柵池高原－15:50 振子沢ツアーコース入口－17:00 蓮華温泉

5日 5:30 蓮華温泉－6:45 瀬戸川の橋－7:55 白高地沢の橋－12:20 朝日岳－13:40
白高地沢の橋－14:35 瀬戸川の橋－16:25 蓮華温泉

6日 6:40 蓮華温泉－9:40 天狗の庭標識－11:20 白馬大池－12:35 船越の頭コルー
14:00 出合－14:25 猿倉

1日目（4日）

長野市内は土砂降りだったが、白馬へ近づくと青空が広がり、北アルプスの白き峰々が見えてきた。今日は不安定な天候という予報で風が強いが、これならスタートする気分にもなる。ゴンドラリフトも問題なく動いているようだ。夜勤明けで車を飛ばしてきたOさんと柵池の駐車場待ち合わせ。余裕で到着するつもりだったこちらの方が遅れてしまい、ばたばたと準備をしてリフトに乗り込む。乗り換えの柵の森駅では2時のロープウェイが出たばかりで、30分後の次の便を待つ。ところがその間に空模様が急変し、雪が降り始めた。予報どおり、やはり今日は不安定なのだ。

2時半のロープウェイで自然園駅に到着。レクチャーをする係員はすでにいなかったの
で、非常識な時間からのスタートにも関わらず、誰にも咎められることはなかった。

5月とは思えない降雪の中、天狗原を目指して登っていく。この間、下ってくる3組の
パーティとすれ違った。好奇の目で見られている気がするのは気のせいかな。遭難騒ぎにな
れば、あの人たちが「こんな時間に上ってくる女性2人組がいた」と証言するだろう。

天狗原はブリザードで厳冬期の様相だが、視界はある。最短コースで振子沢のツアーコ
ース入口方向へショートカットして進む。ときどき雪空の向こうに白っぽく太陽が見えたり、
白馬乗鞍の巨大なシルエットが浮かび上がったたりするのは、この天候ならではの貴重な
絶景かもしれない。スタートから約1時間、振子沢の入口に達する頃には、雲が切れて
青空が見えるようになってきた。ツアーコースの標識は至るところにある。ここまで来れ
ば、あとは何とかかなるだろう。

振子沢には短時間でもそれなりの積雪があったようだ。上から下からの突風が吹き抜け、パウダーが雪煙となって舞い上がり姿を見失う。下がっていくと今度は風で硬くなったボコボコの斜面がむき出しになり、転ばないように滑るのに苦労した。

標識に従って尾根をトラバースし狭くなってきた中ノ沢を下ると、唐突に林道の橋が現れた。スキーを外して橋を渡り、そのまま歩くと蓮華温泉ロッジの駐車場に到着。外トイレの先に今日から2泊お世話になるロッジの建物があった。

オレンジ色に染まってきた空を雲がスピーディに流れていき、風はまったく止む気配がない。ここに来られれば明日は温泉で停滞でもいいよねーと開き直り、暖かい夕食と温泉を満喫。天候と、今年はすでにスノーブリッジがなく雪倉岳へ行く選択肢がないこともあってか、宿泊者は20人程度という少なさだった。



2日目 (5日)

翌朝は4時に起床した。外はうす暗い曇天で、やがて雪ともみぞれともつかないものが降ってきたが、前夜受け取った弁当の朝食を食堂でとり、行けるところまで行ってみようと時間どおり出発する頃にはやんでいた。風は相変わらず強い。

朝日岳へ行くには、まず瀬戸川にかかる橋を目指して標高差300mも下らなければならない。これが朝日岳ツアーをハードにしている理由の一つで、雪倉岳よりも標高は200mも低いのに「朝日に比べたら雪倉は楽しいだけ」とは、ロッジスタッフの方の弁。ロス

少ないルートを探しながらまずは兵馬ノ平までゆるゆると下り、水芭蕉が咲きかけた池塘を横目に通り抜けたら、瀬戸川へ急降下する。帰りの登り返しを考えるとすでにどんよりである。

橋を渡ったところでスキーにシールを装着するが、周囲はどれも雪が少ない。夏道コースの稜線に上がってみるとところどころ雪が切れており、スキーを担ぐ場所もあった（帰りは先行者のトレースを追い、川に近い沢地形を滑ってくるのができた。知っている人は知っているのだ）。

夏道と別れ、白高地沢にかかる橋を背中に五輪尾根の下を沢沿いにトラバースして上がる。支沢に入り、赤男山を見ながら登る。朝方かかっていた雲はもう少しで抜けそうだが、風は昨日と変わらず暴力的だ。右手に伸びる尾根を越え、やがて朝日岳を正面にとらえると、その姿は感動的に美しかった。前にも後ろにも誰もいない。Oさんが「今日山頂行けますよね」と聞く。「風に負けなければ行けるんじゃない」と応じる。空はいよいよ青くなり、今日敗退するとすれば理由は風しかない。Oさんは喜びのあまりか朝日岳を目指してぐいぐい直進していく。どこかで右に回り込むはずなんだけどなあ、まさか直下を直登するつもりか？と訝しく思っていると、突然立ち止まって「間違えました！」と言う。高度を下げないように大トラバースの開始である。

夏道と合わせる稜線下に達し、岩陰でスキーアイゼンを装着。「吹上のコル」の名前にふさわしく、風がぐるぐると回り大変な状況だが、負ける気のしないらしいOさんは力強く登っていく。しばらくスキーで頑張るが、少々堅めの斜面とこの風の中、スキー登高では足元が安定しない気がして仕方がない。ツボ足に変えてみるが、背中のスキーが煽られるたびに地面に伏せるという状況でこれもままならない。頂上まで標高差 100m程度というところでついに観念し、露出しているハイマツの茂みに荷物とスキーをデポし、靴にアイゼンを装着して山頂にアタックすることにした。向かう先には雪煙が渦を巻いているが、ピッケルを手にしたら行けるかもしれないと思った。

12時20分、登頂した。思わずOさんに手を差し出し握手。こんな日に登るなんて大バカ者だとはつぶやくが、さすがに達成感はある。写真を撮り早々に下山開始とする。

デポした場所まで戻り滑走の準備をしたら、頂上から延びる広大な斜面をOさんに続いて滑り降りた。昨日の新雪がまだらに残り、先行するスキーの上手なOさんですら滑りにくそうにしている。そうはいつでも下りは早い。たちまち行きルートに合わせ、白高地沢沿いをトラバースして白高地沢にかかる橋の見える場所に帰り着いた。つくづくスキーの魅力はこの機動力だと思う。蓮華温泉から朝日岳の日帰り往復は徒歩では厳しいが、スキーという乗り物があれば可能になる。登りではわかん以上の浮力を発揮する一方、だるい下りも面白くしてくれる。雪山登山の「使える」アイテムなのだ。

川べりで休憩していると、大パーティが戻る予定のルートに沿って滑っていくのが見えた。ここまで誰もスライドしなかったのが山頂には行っていないはずだが、楽しめる場所を知っている経験者パーティなのだろう。トレースを追い、瀬戸川の岸までスキーを付けたまま下っていく。橋を渡ったらしばらくはツボ足だろうと想定し、シールを装着したスキーを背負って橋を渡った。

わかってはいたが、兵馬ノ平までの登り返しが辛かった。今よりしんどい状況はいつだったっけ？あの時ほど大変じゃないよね…と自分を励まし、平然と先行するOさんに引きずられるように歩いた。兵馬ノ平を過ぎ、キャンプ場の建物が見えるについに今日のミッションの終わりが見えてきた。やけにフレッシュなトレースがあると思ったら、ロッジが見える場所まで来て単独の先行者に追いついた。

その後、空きっ腹でよれよれのまま「仙気の湯」まで登るのがまた辛かったが、湯に浸かると、喜びもじんわりと心に染みてきた。今日登った朝日岳と明日登る予定の天狗の庭に続く尾根を眺める。この日、朝日岳山頂に到達したのは、私たちだけのようだった。





3日目 (6日)

最終日は宿で朝食をとり、予定より40分ほど遅く出発した。ついに風はやみ、暑くなりそうでこれはこれで過酷だ。白馬大池までのルートを取り方は雪の状況によっていろいろ変わってくるらしい。今日はシール登高、スキーを担いでの夏道歩き、アイゼン登高のミックスになり、着脱を繰り返すので時間がかかる。Oさんはツボ足アイゼンよりシール登高の方が好みらしいが、経験値の劣るこちらはきわどいシール登高が苦手だ。おまけにシールの状態も悪く、スタートからシールと板の間に雪が挟まり休憩のたびに指でかき出す始末で、これもシール登高が不安定な原因の一つと思われた。天狗の庭からはべっとりと雪のついたトラバースの夏道を避け、稜線を目指す。前日のダメージ満載の私がペースの速いOさんを待たせつつ、なんとか白馬大池山荘を見下ろす位置まで来た。黒々とした船越の頭が近くなり、後ろから迫るスキーヤーや前から歩いてくる登山者、旋回するヘリなど、周囲は急に人臭さを帯びてきた。

船越の頭までは最後の夏道歩き。時間切れのため小蓮華山往復はパスすることにした。いよいよ滑り、といっても最初の斜度が厳しいんだよねと、到着したコルから金山沢をのぞき込む。はるか下の台地の点がIさんとOさんが教えてくれた。Iさんはこの2人を生み育てた責任上？、今朝猿倉から登ってきてきているのだ。

では私が滑ってみますね、OOさんもOOさんも滑ったから大丈夫ですよ〜とOさんは明るく言うと、急斜面にふわりと滑り込んだ。昨日の新雪が派手に崩れていく。ポジショ

ンを取り直すと、Oさんは安定した滑りで高度を落としていった。さて、一人残されたらいつものとおり「できる」と自分に暗示をかける。ギャラリーがいるがとにかく安全第一で、大きくターンしながらゆっくりと滑っていく。時間をかけてIさんとOさんの待つ台地に到着し白い雪壁を見上げると、スキーなどまるで縁のなかった5年前の自分がよくこんなところを滑るようになったものだとため息が出た。

Iさんによれば、金山沢の状態は悪くないようだ。クレバスが迫る狭いノドやスキーを外してデブりの間を歩く場所はあったが、まばゆく光る山々の景色を楽しみ、他のパーティと前後しながら出合まで下りてきた。最後はだらだらと林道を走り、沢山の車が停まった猿倉の駐車場に到着。濃厚な3日間のツアーが終了した。

蓮華温泉ロッジは、少雪のため年々この時期の宿泊者が少なくなっているとのこと。次回は「楽しいだけ」の雪倉岳にも行ってみたいと思うが、これも雪があつての話なのだ。

